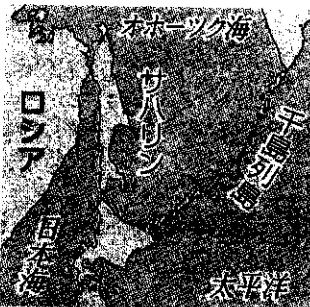


偏狭な愛国主義を脱して チエーホフ「サハリン島」

今年、没後百周年を迎えたロシアの作家、アントン・パブロビッチ・チエーホフ（一八六〇—一九〇四年）に旅行記『サハリン島』（一八九五年刊）がある。サハリン（樺太）は一八七五年の「樺太千島交換条約」で帝政ロシアの統治下に入り、一大死刑地となっていた。作家は一八九〇年夏の約三ヶ月間、ここに滞在し、囚人たちの克明な実態調査を行った。その時のノンフィクション作品がこの旅行記で、中に次のような記述がある。

「サハリンの処女探検の権利は、疑いもなく、日本人に属し、日本人が最初に南サハリンを領有したのだ」

南樺太は日露戦争のボーツマス講和条約（一九〇五年九月）で日本に戻るが、第二次大戦の終戦直後、スターリンが「南サハリンとクリル（千島）列島はソ連に移り」と、「ソ連国民へのメッセージ」を送り、当然のようにソ連領土となってしまった経緯がある。しかしチエーホフは一世紀以上も前、「樺太は元来、日本の領有に属るべきものだ」と認めているのである。



「第二次大戦の結果、樺太がソ連に「返還」されたことになつてゐるが、これは理にかなつた」となのか」。近著『日露領土紛争の根源』（草思社）で重大疑惑を提起した元商社マンのロシア研究家、長瀬隆氏の説明はどうだ。

「樺太が半島ではなく島で

あることを最初に発見したのは、一八〇九年に幕府の命で北樺太を探検した間宮林蔵だった（樺太とユーラシア大陸を隔てる海峡は間宮海峡と呼ばれる）。しかし、この事実を紹介したドイツ人医師、シ

日露開戦から

100年

第5部 突然を超えて

ーポルトの大著『日本』（原本はドイツ語）のロシア語版（一八五三年刊）は間宮の新発見部分を故意に削除、つまり改竄してしまい、ソ連時代から現在に至るまでこの問題はタブーとなっている。

医師でもあったチエーホフは『サハリン島』執筆に当た

り、明らかに『日本』のドイツ語原書を読んでいた

今夏、札幌で国際シンポジウム「21世紀のシベリア・極東」「アジア共同体」のパドナー（北大スラブ研究セミナー主催）が開かれ、特に「チエーホフ・サハリン・日

側の歴史認識は頼りなく、講義大患となるのはロシアに極

論はあいまいなまま終わってしまった。日露戦争が始まるとい

うので私は…今朝日新聞に

家では「葉亭四迷（一八六四—一九〇九年、本名=長谷川辰之助）が領土問題にからめてロシアの出方に率直な懸念を吐露している。死の前年に

は隨想『予が半生の懺悔』にこう、したためた。

「何でも露國との間に、かの樺太千島交換事件という奴が起つて、だいぶ世間がやけられました。ロシアから「チエーホフ『サハリン島』博物館」のツペンコワ館長（ジンコフ・サハリン大学教授が講演したが、論議を呼んだのはチエーホフの「サハリンの日本領土論」で、長瀬氏も自説

本」と題するセッションも設けられた。ロシアから「チエーホフ『サハリン島』博物館」のツペンコワ館長（ジンコフ・サハリン大学教授が講演したが、論議を呼んだのはチエーホフの「サハリンの日本領土論」で、長瀬氏も自説

本」と題するセッションも設けられた。ロシアから「チエーホフ『サハリン島』博物館」のツペンコワ館長（ジンコフ・サハリン大学教授が講演したが、論議を呼んだのはチエーホフの「サハリンの日本領土論」で、長瀬氏も自説

の弟、ウラジーミルが貴重な証言を残している。

「…われわれの勝利は（ロシア皇帝の）本紙注）専制を（三百人劇場）など催しがめの公演（チエーホフ的氣分）で、作家が提起した「領土」の淵源を見つめ直すときではないか。

長瀬氏は「チエーホフの

神は国際主義に満たされて、偏狭な愛国王義とは無縁だ」と指摘する。

二人の「憂国の文豪」に直

接の接点はなかつたが、チエーホフはドイツ滞在中に四十

四歳で病死し、二葉亭はペテ

ルブルクでの特派員生活から

帰国途中、ベンガル湾上で四

十五歳で客死した。

没後百年を記念して今秋、

東京では日本近代文学館主催

の「チエーホフ展」や劇団品

じる押しした。好機をとらえ、

日本露双方は百年の怨讐を超えて、作家が提起した「領土」

の淵源を見つめ直すときでは

ないか。